編集後記

『語文と教育』第三十七号をお届けいたします。

本号は、国語科教育、国文学、日本語教育の分野から寄稿された五編で編集しました。力のこもったご論考に、感謝申し上げます。

今年になって一応とはいえコロナ禍が下火になり、お互いの顔を見て話せる日常が戻ってきつつあります。一方で、この数年で当たり前のものとなった「オンライン」という手段によって、「対面」することの意義が問い直されているように思えます。同じ場にいなくてよいこともあれば、そばにいるからこそできることもあります。近くにいなくても顔を合わせることができるなら、「対面」することの価値は何なのでしょうか。この数年で私たちが感じた、相手の表情が見えることの安心感や、見えないことへの違和感が風化しないようにしたいと思います。

コロナ禍の間、様々な催しが中止や延期を余儀なくされました。対面の国語教育学会も三年間中止が続き、今年ようやく四年ぶりに開催されます。一方で、一度切れてしまった糸をつなぎ直すことの大変さも感じます。運営のノウハウ、参会への意識など、毎年、同じように会があるからつながっていく部分もあります。途切れずに続けることの大切さを考えさせられます。

令和四年十月より、近現代文学担当として構大樹先生が着任されました。宮沢賢治研究がご専門ですが、サブカルチャーにも詳しく、何よりＩＣＴに明るいことで、すでに本コースには欠かせない人材となっています。さらなるご活躍を期待しております。

最後になりましたが、この一年も多くの大学・機関・研究会等より、紀要・会誌等の研究資料をご寄贈いただきました。謹んで感謝申し上げます。大切に保管し、今後の教育・研究に活用させていただきます。

（幾田記）

語文と教育　第三十七号

令和五年九月三十日印刷
令和五年九月三十日発行
（非売品）

編集人　鳴門教育大学国語教育学会
発行人　鳴門市鳴門町高島字中島七四八
（〒七七二－八五〇二）
鳴門教育大学大学院
国語科教育コース内
鳴門教育大学国語教育学会
会長　幾田　伸司

印刷所　㈱徳島印刷センター